

舟とふねとつなぎ合するをいふ也、むやひともいへり、

〔堀川院御時百首〕戀思

木工頭俊頼

むやひするかまのほなはのたえばこそあまのはし舟行も別れめ

〔夫木和歌抄〕三月盡文治六年五社百首

皇太后宮大夫俊成卿

かへる春けふの舟出はもやゐせよ猶住よしの松かげにして

〔類聚國史〕帝王二十五大同四年十二月乙亥太上天皇城〇平取水路、駕雙船幸平城、

〔石清水臨幸記〕文應元年八月九日辰甲今日新院深〇後有臨幸石清水社〇中鴨川尻桂川等爲諸國役

亘浮橋〇註淀川儲組船〇御船著儲之、南北岸構御船建久寛元等例也、

〔勘仲記〕建治二年七月廿四日丙辰攝政殿兼〇藤原氏長者之後始入御平等院〇中至宇治河東岸御

船寄下、當離宮馬場末、寺家儲御舟寄、人々下馬、予兼〇藤原問之、即以下家司忠直御車寄具并御車組

船令用意歟之由、毎年令尋沙汰、先殿下御車放輪舁居、御車副舍人御所侍等役々、宗實公頼等朝臣

祇候御船、御隨身上薦、少々乘鶴船、奉順御車御船、聊令差上之後、又舁居大納言殿御車於組船〇輪放

師俊伊顯候御船、兩方御車輪舁居雜船所令渡也、

〔十六夜日記〕廿三日年〇弘安三てんりうのわたりといふ舟にのるに、西行がむかしもおもひ出ら

れて、いと心ぼそしく、みあはせたる舟たゞひとつにて、おほくの人のゆき、にさしかへるひま

もなし、

〔書言字考節用集〕十數量一艘名〇字彙、艘、船之總

〔續日本紀〕元〇六明靈龜元年三月甲辰、金元靜等〇新還蕃、勅大宰府、賜綿五千四百五十斤、船一艘、

〔拾芥抄〕下末諸事吉凶日

乘船吉日